

民には常性あり。織りて衣、耕して食う。是を同徳と謂う。一にして党せず、命じて天放と曰う。故に至徳の世は、其の行は填填たり。其の視は顛顛たり。是の時に当たりてや、山には蹊隧なく、沢には舟梁なし。万物は群生して其の郷に連属し、禽獸は群れを成し、草木は遂長す。是の故に禽獸も係羈して遊ぶべく、鳥鵲の巢も攀援して闕うべし。

【大体の意味内容】

民衆は 恒常不変の本性がある。 織り物をしてはその 衣類を着、耕作ではその 作物を食べている。それを同徳、すなわち万人に等しい徳という。統一された徳性を持ちながら決して徒党を組んだり、権力に束ねられたりはしない、名付けて天放、つまり天地自然の摂理への解放という。ゆえに最高の徳に満ちた世では、人々の行いは填填としてゆとりがあり、眼差しは顛顛として柔和な光を宿している。このような時代では、人々は自然と一体となった生活をしており、山には小径も隧道もなく、沢には舟も橋もない。万物は群生して人々の村里にまで連なり、鳥獸も群れを成し草木は旺盛に繁殖する。だから鳥や獸たちも人々とつながりあって遊んでいる。木の上にある鳥や鵲の巢にも、攀じ登って覗き込み、雛たちとじゃれあうこともできた。

なぜか手塚治虫の漫画『火の鳥 鳳凰編』を思い出しました。主人公のひとり我王は、莊子の

この部分の話とは真逆の存在でした。奈良時代、生まれてすぐの事故で片目と片腕を失い、村の

中でいじめにあい、過って殺人を犯します。逃ぐ、盗賊として殺戮や強奪を繰り返、再び誤って最愛の妻まで殺してしまいます。

妻への疑いが誤解だと知って絶望し、良弁僧正に拾われて旅の供をします。

この間、病で鼻が醜く肥大しながらも人の心を取り戻し始めます。同時に我執や怒り憎しみの情念を持って余っていた我王が、貧困に苦しむとある村人たちに乞われて「仏像」を彫りますが、自分のあらゆる邪念や狂気をたたきつけるように彫った忿怒像が、見たこともない見事な、鬼気迫る仏像となって多くの人々に感謝されます。それから我王は怒りそのものを祈りとして、彫り続けるようになるのです。

その後も無実の罪を被せられて数年間牢に閉じ込められたり、苦難の連続を生きますが、いかなる時も自分の烈しい怒りや妄執を力として彫り続け、観る者を圧倒し続けます。

この世で最も醜い我王の姿が、次第に神々しさを帯び始めてゆへ。東大寺大仏殿の鬼瓦制作のコンパに出させられ、全霊を込めて生み出した鬼瓦はライバルを打ちのめすほどすさまじいものでした。が不正投票で落選し、のみならず過去の罪を暴かれて残る片腕を切り落とされ、放逐されます。

もはや生きるのが不可能なほどの体になった我王は、その後、奥深い山の中で、鳥獣や草木たちと一体となって生き続けるのです。森羅万象の美しさを知り、涙し、鑿を口にくわえて、まるでキツツキのようにして彫ることを続ける。荘厳な祈りに、生き続けます…

